



TITLE:

固有名の発掘 -アナグラム試論-

AUTHOR(S):

岩佐, 厚太郎

---

CITATION:

岩佐, 厚太郎. 固有名の発掘 -アナグラム試論-. 文明構造論 : 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2014, 10: 3-17

ISSUE DATE:

2014-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191202>

RIGHT:

## 固有名の発掘 —アナグラム試論—

岩 佐 厚太郎

1. 消えた固有名
2. ベンヤミンの「誘惑」
3. アボセーム＝パロールの結露
4. アナグラム＝固有名の支配
5. 結びにかえて

### 1. 消えた固有名

ベンヤミンは「事物は、神のうちのぞいて、固有名をもたない」<sup>1</sup>という。みずから天地を創造した神にとっては、あらゆるものはそれぞれ創造主である自分と固有な関係にある。したがって固有名を持つ。これは分かりやすい理屈である。では神のように世界を創造したこともなければ、もはや創造神を信じてもない地上のわれわれにとっても、ベンヤミンの指摘に反して、特定の事物が明らかに固有名を持っているのはどうしてなのか。これはそう簡単に説明のつく問題ではない。たとえばラッセルは、「これ」「あれ」といったいわゆる論理的固有名を除いて、あらゆる固有名を消し去ることで問題自体を消去している。

彼は、固有名は記述の省略にすぎないという。チャールズ一世という固有名は、チャールズ二世の父親 **the father of Charles II**、処刑された国王 **the executed King** 等々、指示の一意性を表わす定冠詞「**the**」を伴うさまざまな

---

<sup>1</sup> Benjamin:Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen.In:GS, Bd.II, S.155.

確定記述に還元される。つぎにそれらの確定記述はさらに、「the」を伴わないさまざまな不確定記述に還元される。

たとえば歴史上だれか（固有名はすでに消去されているものとして、かりに  $x$  としておこう）がチャールズ二世の父であるということは、「 $x$  はチャールズ二世をもうけた ( $x$  begat Charles II)」ということである。これは、チャールズ二世がこの世に生を受けた以上は、彼を生んだなにものかが存在するという事実関係を一般的に記述している。しかしチャールズ二世の父親 the father of Charles II という確定記述は、ある歴史的な人物を一意的に指示しているから、それと同値な命題をつくるためには、 $x$  以外のなにものもこの父子関係を持たなかったということ、つまり「もし  $y$  が  $x$  と異なるのならば、 $y$  はチャールズ二世をもうけなかった」という新たな記述を追加しなければならない。この二つの記述を連結させた複合命題がつくられることで、確定記述がなくとも指示の一意性が確保されると同時に、もとの確定記述は不確定記述に還元・消去される。

よく知られているように、ラッセルがこれほどまで指示の問題を記述の問題へと回収しようとしたわけは、そうしなければ深刻な論理破綻に陥るからである。彼は＜現在のフランス国王ははげである＞という例を挙げて説明する。この命題が主語と述語からなる有意味な命題であることは間違いない。よってこれは真か偽のいずれかでなければならない。しかし現在のフランスに王はいない。したがってこの命題は指示に失敗しており、真でも偽でもなく単に無意味である。ということは、この命題は命題としては有意味であるにもかかわらず、なにも意味していないことになってしまう。ラッセルによれば、このジレンマを回避する方法は二つしかない。

よってわれわれは、表示対象が一見存在しないと思われる事例に対しても表示対象を用意してやるか、あるいは、表示句を含む命題において重要なのは表示対象である、という考えを捨て去るかなければならない。

この後者が、私の提唱する途である。<sup>2</sup>

ラッセルの提唱する途、すなわち記述理論とは、固有名から確定記述へ、確定記述から不確定記述へと、言語外の表示対象を記述という言語の内部に還元・消去する理論であり、そのことはすでに柄谷行人が『探求Ⅱ』において指摘していることである。しかし柄谷はそのラッセルとソシュールを同列に置いて、つぎのようにいう。

ラッセルが固有名を記述に還元することによって論理学を形式化したように、ソシュールは固有名をまったく無視することによって、言語学を形式化した。<sup>3</sup>

柄谷のこの見解は、後世の研究者によって押しつけられた構造主義の祖という一面的なソシュール観に従っている。しかしあとで見ると、ソシュールがアナグラム論でおこなったことは、ラッセルが『表示について』でおこなったことのまったく逆なのだ。少し先取りしていえば、ラッセルが固有名を記述へと消去していったのとちょうど裏腹に、ソシュールは記述（詩句）の中に埋もれていた固有名を発掘しようとした。そのためにアナグラムという、あたかも農夫が種を播くように、詩人たちが神々の名前を切り取って詩句の中に播いていった詩作技法の存在を証明しようとしたのだ。

しかし他方で、ソシュールがそれまでの歴史的・通時的な言語学を乗り越え、示差的・否定的な共時的構造としてのラング観を確立したこと、それがやがてヤコブソンたちの構造言語学へと受け継がれていったこと、そうしたことも動かしがたい事実である。ラッセルは、なにかを指示するはずの固有名に囲まれながら、それらが実はなにも指示していないという不条理を、固有名を記述に還元することで解決しようとした。だから記述に指示はない。

---

<sup>2</sup> ラッセル「表示について」（松阪陽一 訳）：『言語哲学重要論文集』（春秋社 2013）、59～88 頁所収、69 頁。

<sup>3</sup> 柄谷行人『探求Ⅱ』（講談社 1990 年）、39～40 頁。

同じようにソシュールは、なにかを意味するはずの音声に囲まれながら、それらが実はなにも意味していないという不条理を、音声を音素に還元することで解決しようとした。だから音素に意味はない。柄谷のいうように固有名を特に無視したわけではなく、言語の音的側面をすべて切り捨てたのだ。その意味でラッセル同様、ソシュールも「形式化」をおこなったことは間違いない。それは、ラングを外部から切り離すことでラングの自立を守ったということである。だが、ここではそれを問題にしない。その彼が晩年、アナグラム研究という形で固有名について考え続けていたこと、それがここでの問題である。

## 2. ベンヤミンの「誘惑」

言語から音的側面を切り捨てるということは、主体である話し手の意識の内部で言語を究明するということである。ラングは話す主体の意識の中にしかないというソシュールの有名なテーゼは、ここからくる。それは、まず始めに主体のとり視点があり、その視点によって言語的実体が実体として与えられるという逆説的な事態と同時にある。ところがソシュールの「形式化」をもっとも忠実に継承したはずの構造言語学には、奇妙なことにこうした観点がない。ないどころか逆である。たとえば、ヤコブソンの講義集『音と意味についての六章』に序文として寄せた文章の中で、レヴィ＝ストロースはつぎのように述べている。

音素を示差的要素に分解することは、すでにトルペツコイによって予感されていたが、1938年、ヤコブソンによって初めて完成されて、「話す主体の意識」に頼りきるのをやめることが、「客観的に、少しの曖昧さもなく」はつきりとできるようになった。諸要素の弁別的な価値が第一義の事実を構成するのであって、これらの要素に対するわれわれの多かれ少なかれ意識的な態度は、単にまったく二義的な現象しか表わさな

いのである。<sup>4</sup>（傍点は私）

ヤコブソンの構造言語学の中にレヴィ＝ストロースが見出したものは、話す主体の意識の中になければならないはずの否定的・示差的なラングの体系を、主体の外部に存在する無意識的な構造へと移植していく芸当だった。

まずヤコブソンは第一講義で、音声自体を客観的に観察しても「まるで未知の言語の象形文字」<sup>5</sup>のようであるから、「音響現象としての音の直接の目的という問い」<sup>6</sup>を立てるべきだという。「目的」である以上、それは話す主体の意識に向かって問うしかないことである。それが「音韻論の誕生」（第二講義のタイトル）という成果につながる。ここまではソシュールと同じである。ところが続く第三講義では逆に、「話す主体の精神の中に、音素の対応物を探し続けている」<sup>7</sup>言語学者たちが批判される。なぜなら、弁別特性の束である音素は「必然的に音の中に存在し、音に属し、音と重なり合った状態にある」<sup>8</sup>からである。

音韻から音素へ、音素から弁別特性へと分析が進むにつれて、いつの間にか分析対象が主体の内部から主体の外部にあるものに読み替えられ、主観に訴えることで抽出された音素が、説明抜きでいきなり音声そのものに属する客観的な実在であるとされる。その結果、ヤコブソンはあくまで「客観的に、少しの曖昧さもなく」音素を探求していることになる。価値や意味といった記号的な実体が主観性と客観性との、したがって個人的なもの和社会的なものの絡み合いとして存在する以上、それは当然のことともいえる。とりわけ言語という価値の体系を問う場合、問うこと自体がその客観的な社会性を前提にしてしか成り立たないのに、そのうえなぜそれを問題視するのかといった反論もあり得る。ヤコブソンのいうとおり、「それがどんなに奇妙なこ

---

<sup>4</sup> ヤコブソンの講義集に寄せられたレヴィ＝ストロースの序文より。Jakobson: *Six leçons sur le son et le sens*, Éditions de Minuit 1976, pp.13-14.

<sup>5</sup> Jakobson: *Six leçons sur le son et le sens*, Éditions de Minuit 1976, p.36.

<sup>6</sup> Ibid., p.37.

<sup>7</sup> Ibid., p.65.

<sup>8</sup> Ibid., p.94.

とであろうと、音素を研究する言語学者たちはとりわけ音素の存在様式を議論しようとしたがる」<sup>9</sup>のである。だが、彼のそうした感覚こそ、『言語一般および人間の言語について』に唯一付された注釈において、ベンヤミンが「仮説を最初に置く誘惑」<sup>10</sup>と呼んだもののなのだ。注を付されたもとの文を引用しよう。

ある事物の精神的な本質がまさにその言語のうちにあるという、仮説として理解されているこの見解は、あらゆる言語理論が溺れる恐れのある巨大な深淵である。この深淵の上、まさしくその上で漂いながら身を保っていることが、言語理論の任務なのである。<sup>11</sup>

ベンヤミンが俎上に載せる「仮説」はヤコブソンとは逆に、事物（ヤコブソンの音）が言語（ヤコブソンの音素）の中にあるという言い方になっているが、どちらにしても同じことである。誘惑に乗って両者を勝手に通底させることで、なにかを客観的に語る資格を得たかのように話す饒舌が問題なのだ。

ソシュールはそんな誘惑に乗らなかったし、深淵の上で「漂いながら身を保っていること」も潔しとしなかった。彼はむしろ、深淵を深淵のままのぞき込むことを望んだ。つまり、「それがどんなに奇妙なことであろうと」、それでも言語の「存在様式を議論しよう」としたのだ。主観的、個人的なものが客観的、社会的なものとして与えられていることは間違いない。与えられているから、だれもが互いに話しているのだから。だがそれはいったいどういういった事態なのか、なぜそんなことが可能なのか。ソシュールはそう問う。それを問わなければ、音素もヘチマもない。そうした思いが彼をアナグラムへ、固有名へ向かわせるのだ。それはちょうど、だれもが自明のこととして交換し合っている商品について、なぜそれが交換可能なのかと問うことから『資本論』を書き起こしたマルクスに似ている。

---

<sup>9</sup> Ibid., p.65.

<sup>10</sup> Benjamin:a.a.O., S.141.

<sup>11</sup> Ebd.S.141.

### 3. アポセーム＝パロールの結露

ソシユールはアナグラム研究の中で固有名そのものを主題的に論じているわけではない。というより、ソシユールには固有名を主題的に論じたものがない。しかしあまり注目されることはないが、たとえば彼はあるところで、アポセームという独自の用語についてこんな断章を書き留めている。

（指し示すためになにか対象を任意に選ぶときのように）ラングが単純な名称であるようなケース。名称の特殊性は記号全体の一部なのだから、そこでは、いわばセームの心理的な結びつきの中に、議論の余地なく第三の要素があることになる。その要素とは、記号の一般的な規則からのがれるほど十分それ自体において画定された外的な存在にセームが結びついているという意識である。<sup>12</sup>（傍点は原文の強調箇所）

セームは古代ギリシア語の  $\sigma \eta \mu \alpha$ （記号）から来ており、要するにラングのことである。したがって「セームの心理的な結びつき」とは、最終的に一般言語学の講義においてシニフィアンとシニフィエの結合という言い方で表現されるものであるが、彼はその中に「第三の要素」があるケースを指摘し、それは「ラングが単純な名称であるようなケース」、すなわち固有名の場合であるという。そして固有名という記号にあっては、「記号の一般的な規則からのがれるほど十分それ自体において画定された外的な存在」にセームが結びついていると彼はいい、それをアポセームと呼んでいる。アポは「～から離れて」を意味するギリシア語の接頭辞である。「記号の一般的な規則」から離れているからアポセームなのである。

「記号の一般的な規則」とは、ラングを特徴づける恣意性や否定性のことであろう。だがそうした規則の根底には、言語においては実体に先立ってまず主体の視点があり、その視点によって言語的実体が実体として与えられる

---

<sup>12</sup> Saussure: *Écrits de linguistique générale*, Gallimard 2002, p.106.



とする言語観があるはずだが、アポセームはそもそもそれに従わない。それは主体の視点とは無関係に、「それ自体において画定され」ている。そのうえシニフィアンとシニフィエに対応して、それぞれ音声アポセームと知的アポセームがあるとまで、いったん彼は考えていた。

こうした考えはすべて、セームの外部にアポセームが存立しているのか、同時にまた知的なアポセームがどこかで立証されるのか、そうしたことを知るといって問題を立てる。たしかに、固有名《ローヌ川》にはいわば二つのアポセームが並んで現れている。しかし根本的には、そうしたことはあり得ない。なぜならもし **Rhône** という名が変わってしまったら、もはや同じセームはあり得ないし、それ以降はこれら二つのアポセームについて議論する意味もなくなるからである。したがってセームが、選ばれた物質的な記号の中にその根源的な基盤を持っていることのよい証拠なのである。<sup>13</sup>

結局、二つのアポセームのうち知的アポセームは捨てられるのだが、「**Rhône** という名」すなわち音声アポセームは残される。それがなくなれば固有名自体がなくなるからである。そしてそれは固有名が「選ばれた物質的な記号の中にその根源的な基盤を持っていること」を指し示す。「物質的な記号」とは奇異な表現である。しかしアポセームについてはそのようにしか言い様がない。固有名の音的側面は単なるシニフィアンではない。それはラングが見出される過程で切り捨てられたはずの音声そのものに投錨しているシニフィアンなのだ。その意味では固有名は、半身はシニフィエという主観に属し、他の半身は音声という客観に属するヌエのような記号である。しかしそう見えるのはつぎに述べるように、パロールではなくラングの立場から固有名を見るからである。

ソシュールのアナグラム研究は職務命令としてやむなくやりだした一般言

---

<sup>13</sup> Ibid., p.106.

語学講義の数年前から始まり、1909年、自分の研究に肯定的評価を求めた現代ラテン詩人・ジョヴァンニ・パスコリ宛ての手紙に対して、結局返信をもらえなかった時点で途絶している。1909年といえば、計三回なされた一般言語学講義のうち、2回目が終了した年である。周知のとおり、ソシュールの講義は1911年、ラングの言語学を終えて予定していたパロールの言語学に入るまえに中断している。その中断とアナグラム研究の途絶とは無関係ではなく、両者は連動している。彼は闇を掘り進む坑夫のように、古典詩の中にアナグラムを、アナグラムの中に固有名を、倦むことなく発掘し続けたが、それは根本的にはパロールの中にアポセームを発掘するという、より大きな問題意識の具体的な展開であった。

いや、アポセームの発掘という言い方は適当ではない。本来、パロールにおいてアポセームは発掘されるまでもなく、すべて目の前に与えられているからだ。われわれは通常、意識の内部にシニフィアンとシニフィエの結合体がまずあって、それを知覚可能な音声として外化するというように考える。しかしそれは後からつけた理屈である。普段だれかと話しているときには、われわれは音声という空気の振動にじかにシニフィエを乗り移らせている。それは外化や対象化といった＜学問＞的な説明よりも、むしろ物に憑くという意味で＜憑依＞とでも言い表した方がよく分かるような現象である。

話す主体にとってラングと実在との間には完全な一致がある。記号は実在を覆い支配している。いや、記号はその実在である（*nōmēn ōmēn*、パロールのタブー、言葉の魔術的な力etc）。実をいえば、話す主体と言語学者の観点は、この点であまりにも違っており、名称の恣意性に関する言語学者の主張といえども、話す主体の正反対の感覚を打ち破れないのである。<sup>14</sup>（傍点は原文の強調箇所）

言語学者・バンヴェニストのこの率直な述懐は、パロールの魔術的な作用

---

<sup>14</sup> Benveniste: *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard 1966, p.52.

を単刀直入に語っている。ところがたいていのパロール研究は、公衆の前で決まったテーマの演説をするとか、過去の出来事を第三者に報告するといった、それ自体ラングに汚染された＜高度＞な言語使用から逆算してパロールを解釈してしまうから、日常の身近なパロールの本質を見誤ってしまう。眼鏡のように目の近くにあるものは、かえって見えないのだ。

日常の身近なパロールにあつては、すべてのセームはそのままアボセームである。だがセームの代わりにアボセームがあるということは、「記号の一般的な規則からのがれる」ような事態がそこにあるということであつて、それは「記号の一般的な規則」に立脚するラングの言語学の立場とは両立しない。バンヴェニストがいつていることはそういうことである。だからラングからアボセームを見ると、それは主観と客観、観念と物が混線したヌエのようなまがい物にしか見えない。ヌエといえはヌエである。だがそれはパロールがみずからの結露として生み出す「物質的な記号」なのだ。

ソシュールはしかし、アボセームを術語として確立しないまま捨て去ってしまう。残された『一般言語学講義』はラングの言語学であつて、当然そこにもアボセームは出てこない。ソシュールにとって言語の本体はあくまでラングである。しかしほかならぬそのソシュールが古代詩のアナグラムの中に、固有名の姿を借りて身を隠すように生き続けているアボセームを追いかけていたのだ。

#### 4. アナグラム＝固有名の支配

『語の下の語—ソシュールのアナグラム』の冒頭で、編者と同時に注釈者であるスタロバンスキーは、膨大なアナグラムの研究ノートの中に残されていたつぎのような断片を紹介している。

いろいろな概念は、bœuf、lac、ciel、rouge、triste、cinq、fendre、voir のようにラングの中に準備されて（いわば言語的な形式を身にまわって）そこにある。いかなる瞬間に、あるいはいかなる操作のおかげで、それらの間に立てられるいかなる作用によって、いかなる条件において、

これらの概念はディスクールを形作るのか？<sup>15</sup>（傍点は原文の強調箇所）

ここでのディスクールはパロールのことである。いったいどうやってラングの中にあるものがパロールという姿を持つことができるのか、とソシユールは自問し数行後でつぎのように自答している。

一見、答えは単純であるように見える。すなわちディスクールは、いかに初歩的でわれわれにはまだよく知られていない道によってであろうとも、言語の形をまとして現れる二つの概念の間に一つの関係を確立することにその本質がある。それに対してラングは、思考の意味作用をそこにあらしめるべくお互いに関係づけられるのを待っている孤立した諸概念を、前もって実現しているにすぎない。<sup>16</sup>

パロールはラング（概念）の間に「一つの関係を確立する」。一方、ラングは「関係づけられるのを待っている」。相思相愛の仲のように、ラングとパロールは呼びかけ合う。ソシユールの答えは実に単純である。しかしあくまでも「一見、答えは単純であるように見える」にすぎない。この答えの直前で、彼はすでにこんなふうにいっていたのだから。

これらの語の連続は、それが喚起する諸観念がいかに豊かであろうとも、ある個人が他の個人に向かってそれを発音しつつ彼になにかを意味しようとしているということを、決して示したりはしない。ラングの中で使われるのを待っている辞項を用いてなにかを意味しているという観念を持つためには、なにが必要なのか？それはディスクールとはなんなのかを知るのと同じ問題なのだ。<sup>17</sup>（傍点は原文の強調箇所）

---

<sup>15</sup> Starobinski: *Les mots sous les mots*, Gallimard 1971, p.14.

<sup>16</sup> Ibid., p.14.

<sup>17</sup> Ibid., p.14.

ラングは豊かな観念の海である。しかしどうすれば、それを物である音声に染み込ませて特定の意味として他者に届けるなどということができるのか。ラングはあくまで否定的・示差的な観念の体系である。一方、音声は即自的・実体的な物である。音声とラングとはそもそも存在の秩序が違うのだ。なるほど大工が家を建てるのも、芸術家が彫像を彫るのも、すべて観念を物へと外化・対象化することである。似たことはいくらでもあり、ラングもまた喉や口蓋の動きによって物（音声）に外化・対象化されるというだけである。だから「一見、答えは単純であるように見える。」

しかしそのように見えるとき、大工であれ芸術家であれ、だれもがパロールという〈憑依〉のおかげで観念と物という異次元の間を自由に往き来できているのだということが忘れられている。いや正確に言えば、パロールにおける固有名すなわちアポセームのおかげで、というべきだろう。固有名はアポセームとして外部の物、すなわち音声と結合して一意的な指示関係を開くのである。

アナグラムとはそうした固有名による詩句の支配なのだ。たとえば、ヴェーダ詩に関する研究の中でソシュールは、それは「讃歌が対象とする聖なる名に属している音節の、讃歌における再生産」であり、「聖なる名の音節を模倣するという重大事に心を配っていることを示している」<sup>18</sup>と述べている。「聖なる名」とは神々の固有名である。「再生産」「模倣」とは固有名の音を音節に細断して詩句の背後に何度も忍び込ませることであり、忍び込ませるのは詩句を背後から操作するためである。どのように操作するのか。それらを固有名の余沢にあずからせ、それらを固有名の固有名性—すなわち外部性や事物性や一意指示性—の中に吸収することによってである。それがアナグラムというパロールの技法の本質なのだ。

具体的な例を見てみよう。古代ローマの歴史家・ティトゥス＝リウィウスによって報告された神託の一節の分析である。

---

<sup>18</sup> Ibid., p.36.

Dōnōm ① **amplōm victōr**

(くさぐさの品を、勝者よ)

① A PŌL Ō

② **ad mea templa pōrtātō**

(我が神殿へと持ち来たれ)

② A PŌL Ō

②に比べ、①のアナグラムは不完全である。テーマ語であるアポロ神 *Apollō* の語頭の *A* と語尾の *ō* が詩句を挟み込む完全な形になっていないからである。したがって①だけではそこにアナグラムを見出すには至らない。しかし完全なアナグラムを構成する②の詩句が規範 *mannequin* となることで、<sup>19</sup>①をもアナグラム化していき、このようにして連鎖的に詩句全体がアナグラムの複合体になっていく。聖なる名 *Apollō* はこうしたアナグラムの増殖過程の中を響き渡し、その音にひれ伏すように詩句全体が固有名の影響下に入っていく。

もう一度、最初の引用にもどろう。「いろいろな概念は、*bœuf*、*lac*、*ciel*、*rouge*、*triste*、*cinq*、*fendre*、*voir* のようにラングの中に準備されて (いわば言語的な形式を身にまとして) そこにある。」同じく *amplōm* も *ad* も *templa* もラングとしてそこにある。しかしそれだけでは「ある個人が他の個人に向かってそれを発音しつつ彼になにかを意味しようとしているということを、決して示したりはしない。」では「ラングの中で使われるのを待っている辞項を用いてなにかを意味しているという観念を持つためには、なにが必要なのか？」すべてはこの問いに収斂する。そしてアナグラムの中に響き渡る固

<sup>19</sup> ②についてもソシュールは決して完全なアナグラムとは考えていなかった。そのことは彼自身の解説からも分かる。それは彼がいかに緻密にアナグラムを抽出しようとしていたかを示す証左でもある。「この句は、わたしが *Apollō* のための《アナグラム複合》と呼ぶものを形成しながら、*A*—で始まり、—*Ō*で終わっている。しかしながら、この複合全体は必ずしもアナグラムの全要素を含んでいない。それは諸要素を含んではいるが、唯一、一回の *l* のせいで誤って *APOLŌ* のように扱われるという不十分さを持っている。*Ad* が *Apollo* の *A*—という語頭を指示するのに役立った後で、音節に分けてみると、この *a* が再度取り上げられる。そして *templ-A PŌrtato* という句は、*Apo-lo* のまえ半分を導いている。アナグラムが分散せずに、限られた複合の内部を動き、このように句頭と句末によって首尾よく示されている場合には、こうした語群の表現に対してあまり欲張った要求をしてはいけない。そうした観点から、*templa* の *L* について判断しなければならないのである。とはいえ、この *L* は *APOL*—と (不具合にはあっても) つながっており、かつ *PL* によって *POL* という音節を連想させるために *P* の後に置かれてもおり、要するにその効能を示す多数の印に囲まれて存在しているのではあるが。」 *Ibid.*, pp.70-71.

有名の音を聞き取ったとき、ソシユールはまさに言葉によって世界が「意味」で満たされる瞬間を体験していたのだ。それは数千年も昔、古代の人々が吟遊詩人のパロールに聞き取った感動と同じ体験であったに違いない。

## 5. 結びにかえて

固有名とはなんであったか。ソシユールによれば、「記号の一般的な規則からのがれるほど十分それ自体において画定された外的な存在にセームが結びついているという意識」におけるラング、要するにアポセームの意識におけるラングである。しかしそのすぐあとでソシユールは、「話す主体は彼らが声に出すアポセームについていかなる意識も持たない」とも語っていた。音として声に出されるにもかかわらず、アポセームは意識できない。意識した瞬間に、それはすでにセームなのだ。これは矛盾だというまえにまず、「記号の一般的な規則からのがれる *échapper*」などということが、われわれには本当に可能なのか、と問うべきかもしれない。もしそれが不可能なら、アポセームをアポセームとして意識することはやはり不可能であろう。そしてまたしても「一見、答えは単純であるように見える。」人間は記号的存在である。だれも記号から離脱することなどできない。

だがそのように考えることこそ、われわれがすでにラングの習慣にあまりに汚染されていることの雄弁な証明である。この小論の目的は、ソシユールのアナグラム研究に固有名という補助線を引くことでその深さと大きさを少しでも見つめることであった。そのためにもまず、われわれが普段から使い慣れているいわゆる固有名詞をカッコに入れて、アポセームと結びついたソシユールの固有名と決して同列に置かないようにしなければならない。

たとえばわたしの名前は全国に何千とあるだろう。また過去に何千とあっただろう。したがってそれは決して、「それ自体において画定された外的な存在」と結びついた固有名ではない。逆に、イエス・キリストや夏目漱石といった世界に一つしかない名前は、いままで無数の人々の記憶を通過することで、無数の〈わたしのキリスト〉、無数の〈わたしの漱石〉の集合名になっており、もはや一意的になにかを指示できる固有名ではあり得ない。周知

のとおり、これはラッセルの記述理論に反対する論拠の一つになっている。ある名前を完全に記述に還元・消去しようとすれば、天文学的な量になるのである。

そこから、固有名はなにものかを固定的に指示するだけで、無条件に記述に還元されたりはしないというクリプキ流の考えも生まれる。もちろんクリプキも固有名は明確な記述（意味）を持つと述べてはいる。ただ、それは共同体の「最初の『命名儀式（baptism）』」<sup>20</sup>が正確に伝達される中で見出されるのであって、論理的な還元によって見出されるのではない。ということは結局、固有名にはそれが流通している現実世界の中に、おのずと有効な射程距離というものがあるということではなかろうか。そしてごく狭い共同体、極端に言えば、わたしという存在がわたしの身体という事実性によって有限な輪郭を与えられているのと同じように、わたしという存在がわたしの固有名によって有限な輪郭を与えられており、さらにそれが正確に伝達・継承されていく規模の共同体、それが固有名の本来の有効射程なのではないか。そうした射程制限があるから固有名は翻訳不可能なのだ。

ソシュールの固有名はそうした射程の中にしかない。したがってバラバラのラングに統一した意味が与えられることも、そうした射程の中でしか起きない。それは小さな共同体が生むパロールという＜憑依＞の奇蹟なのだ。ソシュールのアナグラム研究はあくまでもこうした有効射程内でおこなわれている。そこにはたしかにアポセームがあり、人はだれもそれを意識している。しかし射程の外から眺めるものにとっては、そこにアポセームがあるにもかかわらず、それが見えない。だからソシュールのやっていることが単に酔狂な時間つぶしに見えてしまう。しかしそれはパロールの言語学を予見させる試みであり、その核心において、ラングの言語学である『一般言語学講義』の全重量に匹敵しているのである。

---

<sup>20</sup> クリプキ『名指しと必然性』（八木沢敬・野家啓一 訳、産業図書 1985 年）、115 頁。